

豫科練



No.470 令和4年

5・6月号

| | |
|---------------------------------|----|
| ○連載《シリーズ海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑》No.12… | 2 |
| ○連載《シリーズ海軍飛行予科練習生遺稿》…………… | 3 |
| ○第55回予科練戦没者慰霊祭最終ご案内…………… | 4 |
| ○三四三空隊史⑫…………… | 4 |
| ○故遠藤中佐を偲んで②…………… | 10 |
| ○さらば予科練④…………… | 14 |
| ○弟…………… | 18 |
| ○天国へのメッセージ…………… | 19 |
| ○予科練教官として①…………… | 20 |
| ○寄付者芳名簿…………… | 23 |
| ○事務局日誌…………… | 23 |

公益
財団法人

海原会

高松宮妃殿下御歌
予科練習生を偲びてよめる

海はらに

はたおほそらに

散華せし

きみら声なく

いく春やへし

わろ

高松宮妃殿下御歌

霞ヶ浦に立ちて海軍飛行
予科練習生を偲びてよめる

海はらに

はたおほそらに

散華せし

きみら声なく

いく春やへし

この御歌は、高松宮喜久子妃殿下の御直筆で、有栖川流と申しあげ、妃殿下はその御宗家にあたられると承ります。

海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑 わが飛翔の地の碑 No.12

わが飛翔の地の碑



所在地 境港市航空自衛隊美保基地内

「わが飛翔の地」の碑は、大空の戦士を志して海軍搭乗員たるべく甲飛十三期として基礎教程を終了し、憧れの練習機の操縦教育を受けるべく第二美保海軍航空隊に入隊し、猛訓練を受けた人々によって建立された碑である。

甲飛十三期は、海軍の搭乗員急速養成の必要から、昭和18年10月1日（前期）同12月1日（後期）の二回にわたり、甲十二期の十倍、約二万八千名の大量採用となった。

美保海軍航空隊は、昭和18年10月1日に開隊して予科練教育を開始した。次いで同19年1月15日、陸上機操縦教育担当の練習航空隊として第二美保海軍航空隊が開隊した。

甲飛十三期は基礎教程を卒業し、7月25日一七六名が、第四十期飛行練習生として入隊し、初めて大空を翔び、翌20年2月まで八ヶ月間の飛練教程の猛訓練を受けた。

初めて大空を飛翔した強烈な印象は生涯忘れる事の出来ないもので、往時を偲びこの地に記念の碑を建立した。

所在地 境港市航空自衛隊美保基地内
建立年月日 昭和五十六年十月四日

海軍飛行豫科練習生

遺書 遺詠 遺稿 辞世

遺詠

神風特別攻撃隊第二御楯隊
六〇一空戦闘三一〇飛行隊所属

海軍上等飛行兵曹

志村雄作

二二歳
山梨県

第十五期乙種飛行予科練習生

いくたびの

戦さを経れど散る時は

御国を守る

われ御楯なり

昭和二十年二月二十一日、神風特別攻撃隊第二御楯隊の零戦直掩隊で、八丈島を発進し、硫黄島周辺海域の敵機動部隊攻撃に参加し、敵機との空戦中被弾し自爆戦死する。

遺詠

神風特別攻撃隊第一神雷桜花隊
七二一空第一攻撃隊所属

海軍二等飛行兵曹

新美昭二

一八歳
愛知県

第三期乙種（特）飛行予科練習生

皇国の

若き男児の本懐を

笑って散った

この心かな

昭和二十年三月二十一日、桜花を抱いた一式陸攻は鹿屋基地を発進して、鹿屋南東沖一六〇度三六〇哩の敵機動部隊艦船を攻撃中、敵邀撃機と交戦中被弾し自爆戦死する。

第55回予科練戦没者慰霊祭最終ご案内

一 予科練慰霊祭記念演奏会

日時 令和四年五月二十八日(土)

午後一時半開場 午後二時開演

場所 阿見町本郷ふれあいセンター大ホール

最寄り駅 JR常磐線荒川沖駅東口タクシード5分

演奏 海上自衛隊横須賀音楽隊

二 偲ぶ集い

日時 令和四年五月二十八日(土) 午後六時開宴

場所 ホテルマロウド筑波(つくば)「飛天の間」

会費 六千五百円/一名

三 慰霊祭

日時 令和四年五月二十九日(日) 雨天決行

午前十一時(受付九時開始)

場所 雄翔園 陸上自衛隊土浦駐屯地武器学校内

※ 受付場所・予科練平和記念館横広場

会費 参加者 三千円/一名(ご同伴者同額です。)

会費はお弁当代及び慰霊祭実行費用として使用させていただきます。

四 玉串料の奉納

ご高齢等のために慰霊祭にご参加いただけない会員皆様には、玉串料を募集させていただきますので、奉納を希望される方は、同封の「郵便振込取扱票」をご利用ください。奉納されました玉串料で、生花を二人像に奉納いたしますとともに、ご芳名簿を作成して奉奠いたします。

連絡先 「第五十五回予科練戦没者慰霊祭実行委員会」

TEL 029-886-5400

コロナ蔓延防止措置などの再規制があった場合には、規模を縮小して開催される事がありますので、ご承知の上でお申し込みください。規模を縮小する場合には参加申し込みをされた方にのみ、改めて葉書で連絡させていただきます。

三四三空隊史(12)

夢幻の如し

— 亡き戦友を偲ぶ —

山田 肆郎(四〇七)

繁栄に溺れ歴史を忘れる民族は滅亡する。エジプト、ギリシャ、ローマ、中国と栄華に潰れた民族は千年、二千年といまに再起ができないでいる。そしていま日本は大きな転換期に立っていると書いてもよい。

一つの世代が、つぎの世代に歴史を語り継ぎ、その伝承をうけた世代がまたつぎの世代に語り継ぐ。そこに人間の、国の永続性が保たれ発展して行く。

われわれ戦中派は凄絶な戦争を、有史以来の敗戦を、そして荒廃から復興の中を生きてきた。その生きざまを子供に正しく強く語り民族の、国の歩みに誤りを犯すことのないようにする、それがわれわれの責務であり、また亡き戦友の霊に

うる道だと、常日頃思うこのころである。

私は海軍生活は僅か二年だが、しかし海軍の生活に誇りと生きがいを持ち続けている。司馬遼太郎氏が、『坂の上の雲』を書く際「海軍の人間には、今も共通の面差しが残っている。これは陸軍にはない素晴らしい海軍九十年の遺産である」という卓抜した着眼を披露している。その海軍生活、めまぐるしく動いた僅か二年の日々を回想し、亡き戦友の面影を偲んでみたい。

第十三期飛行予備学生として土浦航空隊に入隊したのが十八年九月だった。二か月の基礎訓練のあと筑波航空隊で中練教程の飛行訓練。八時間でトップを切って単独飛行のあと飛行時間十四時間で大村航空隊の零戦実用機訓練に移る。

飛行時間三十五時間四か月で卒業、八月愛知県明治基地にいた三四一空四〇二飛行隊（分隊長藤田怡与藏大尉）に配属された。詰め込み、送り込まれて

第一線機へと段階を昇って来たものの、そこで二千馬力の紫電が着陸時に転覆する事故続発するのを見て、命もこれまでと思つたが正直な感想だった。九月台湾、比島方面の戦雲急を告ぐるにもない、部隊は宮崎に転進し、まもなく台湾へ、そして比島にと進出。離着陸訓練をしてわれわれはそのまま宮崎に残された。そして四〇二で比島に行つた搭乗員の大半は故国に帰らなかつた。

その中で四〇二から十九年十一月、先輩矢野徹郎中尉（予備学生十一期）は第三神風攻撃隊として散華され、私と一緒に四〇二に少尉で赴任した達川中尉（海兵）、大村空で同期で親友だった植村直久少尉は神風隊大和隊として、特攻の魁として比島の空に散つた。忘れられない三人の記憶が残る。

四〇二の留守部隊として宮崎から串良に移り、そして十九年の十一月末四〇七飛行隊に転じて笠原から出水に移り、林大尉の下で紫電の新しい飛行

隊が訓練を始めた。四〇七は出水での二か月の訓練のあと、二月中旬三四三空の松山に移動集結して、三月十九日の輝かしい戦果の一翼を担つた。

この写真は二十年二月末松山基地で撮影した四〇七飛行隊の記念写真で、私は当日所用で不在のため写真に入っていない。戦後戦死者の名簿をさぐり〇印をつけたのだが、四十四人中、二十五人が国の護りにと命を捧げている。

島大尉は隣の岩手県花巻の人。大塩、川端中尉は出水時代からよく酒を飲んだ仲間、石塚少尉は出水時代から休日に温泉に出掛けて酒をくみ交わした人で、思ひは尽きない。

林大尉は笠原から一緒に、生き残りの山口飛長は東京に出てくれば今でも必ず鎌倉の墓に線香をあげに行く。

剣部隊は四月鹿屋に移り、三飛行隊の搭乗員補充のため四〇一飛行隊が編成され、豊田大尉を分隊長に私らは松山に残つた。零戦、艦爆などから新し

い隊員が続々と集まり、紫電の訓練が始まつた。やがて徳島に移り、また松山に帰つたが、離着陸で、空中接触で殉職者が続出した。

同期の村田少尉が鳴門海峡上空で編隊訓練中接触事故で殉職した。結婚一週間目、新妻に事故を知らせに行く辛さが今でも忘れられない。

松山基地はB-24などの空襲で叩かれ、山腹の壕生活。広島島の原爆を対岸にみた五日あと、大村の四〇七飛行隊に配属になり、原爆の被害を車窓から眺め久しぶりに四〇七飛行隊に帰つた。

既に林大尉亡く、出水基地以来の戦友は数えるほどしかなかった。余命いくばく、と思ふ日々だったが、間もなく八月十五日の終戦。二十日源田司令の敗戦の言葉、そして休暇で帰省し、十一月高松で復員の手続きをすませて海軍の生活に別れを告げた。

「亡き戦友のため、日本の再興を期す」が敗戦時の誓いだつ

た。それから二十七年、私はスキーの道を、オリンピックの夢を追い続けた。

昭和四十七年二月、第十回冬季オリンピックが札幌で開かれた。日本のスキートームのヘッドコーチが私の仕事だった。そして三本の日の丸を七十メートル級ジャンプ競技で札幌の空高く掲げた。しかも天皇陛下御観覧の目の前に。日本はかつて日の丸三本を掲げたことが六回あるが、みんな外国での試合ばかりである。日本オリンピック史上に二度とないであろうこの快挙を果し得て、「亡き戦友に誓った日本の再興のために——」こう思うと涙がとめどもなく流れ、雨の空に、九州の空に散った戦友の面影が走馬灯のように走るのだった。

彩雲偵察機と

『三魂之塔』

田中 三也 (偵四)

松山基地へ

昭和十九年暮れ、偵察第四飛行隊は第一四一航空隊に所属し、彩雲隊と慧星隊とがあつて、比島のバンバン基地に布陣していた。

二十年一月、彩雲隊と一部の慧星隊は、数機をもつて台南に引き揚げ、司令(中村子之介大佐)以下残留隊員は、バンバンの山中に立てこもつた。

数日後、慧星隊の十数名は、命によつて司令と決別し、陸路敵中突破に成功した。そして半月後、ようやく彩雲隊に合流することができた。しかし、心身ともに疲れ、骨ぬき同然の状態であつた。

そんなある日、「偵四は、再編制のため、松山基地へ移動する」との伝達があつた。漂流中に、船を見つけたような思いがした。しかし、比島のどうくつで、救出を約束した戦友のことを考えると、手ばなしで喜ぶことはできない。とにかく飛行機が欲しい。不安と期待とが入りまじつた複雑な気持ちである。

二月十三日、いよいよ戦線

を離れる日が来た。小一時間も飛んだ頃、輸送機は、台湾沖に差し掛つた。キラキラと無気味に光る海。四か月前に、多くの友を飲んだ憎い海だ。誰れ言うともなく、しばらく黙とうした。

断雲の間から九州が見えてくる。山には、緑が一杯だ。懐かしいな——!

「あのあたりが都城かな」その一言に、全員が窓に吸いつくようにして、偵四の生い立ち当時を懐かしんだ。

瀬戸の海が次第に大きくなり、松山飛行場が見えてきた。ずらりと並んだ飛行機、『紫電』だ。あるわあるわ、びっくりした。

途中、敵との接触もなく、無事に松山基地に着陸できた。早春とはいえ、南方馴れたわれわれには、寒さがずきんとこたえた。

三四三空の作戦

偵四は、二月一日付で第三四三航空隊所属となつた。ほかに戦闘機三個飛行隊も所属して

いた。戦闘機と偵察機が、一つ傘の下で戦うことは異例のことである。

一同勢ぞろいして訓示があつた。司令は、精かな顔立の智将らしい源田大佐である。甲高い声。本土決戦に備え、制空権を確保し、逆転のきつかけにしようとする決意のほどがうかがわれた。偵察隊の任務は、彩雲の俊足を利用して、いち早く敵情を入手し、戦闘隊を有利な態勢に展開させることである。この作戦は、膚合いの違う荒武者連中との協同だけに、心強くも感じるが、防戦への落目もチラツと感じさせた。

いざ決戦

決戦への猛訓練が開始された。雪中駆け足、断髪令とやつぎ早にハツバがかけられた。

戦闘隊のテント張りの各陣屋には、新選組、天誅組、維新隊と、それぞれ端午の節句を思わせるような幟旗をなびかせている。

偵四は、米仏艦隊を迎え撃つ

た長州の人、高杉晋作にあやか
って、奇兵隊と名付け、艦型識
別訓練に余念がない。

紅顔の美少年達は、色とりど
りのマフラーに日の丸はち巻
きも勇ましく、天を突きあげる
勢である。腕、帽子、ジャケッ
トと全身に味方識別の目印（日
の丸や軍艦旗）を着けるあたり
は、本土決戦らしい着想だ。

屯所の裏では、湯を沸かす煙
が立ち、ホワイトチイチイ退治
（シラミ退治）にも精がでる。

一騎当千の猛者共も、心のう
ちでは、良い死に様を願ってい
るようだ。

戦爆連合にいとむ彩雲
三月十九日、空母十五隻を含
む敵機動部隊は、前日来、日本
本土に接近しつつあった。

午前四時、偵察隊搭乗員の整
列の時刻だ。千載一遇の好機に
やや緊張気味の面持ちで戦況
に耳をかたむけている。

遠くの試運転の音も止み、再
び静けさもどった。宿舎へ引
き揚げる整備員か、赤いランプ

がチラチラ見える。普通の日と
変わらない夜明け前のひとと
きである。

東の空が、ほんのりと赤味を
おびる頃、各指揮官も顔をそろ
えた。壕内の司令部には、決戦
の策を練る様子が見える。

五時四十分、彩雲三機が二千
馬力の快音を残し、四国南方の
敵を求めて飛び立った。無事を
祈って、機影を追った。

壕内の無線室には、電燈があ
かかかともり、決戦前の緊張
が続く。待つこと一時間。

高田機から、無電が入った。
「敵機動部隊見ゆ、室戸南三
十哩〇六五〇」

他の彩雲からも入電があり、
壕内が急に殺気立った。

「われ、エンジン不調引き返
す」高田機からだ。どうしたの
かな、心配だ。

「敵大編隊、四国南岸北上中」
「さらに、敵編隊見ゆ、地点
高知上空」

「敵は戦爆連合五十機北上
中、高度二千米」
高田機から、やつぎ早やに入

電した。

待機中のJ改（紫電改）の一
隊が、発進していった。そして、
彩雲一機も、誘導のため、J改
の後に続いた。

「さらに、敵三個編隊見ゆ、
戦爆連合百機北上中、高度四千
米、高知の西二十哩」

敵状が、くしの歯を引くよう
に読みとれる。もちろん、上空
で待機中のJ改へも連絡され
た。

七時四十分頃、またしても高
田機からだ。

「ククク」（われ空戦中）
一瞬シーンとした。

単機で、敵大編隊に立ち向か
う機長の叫びが聞こえるよう
だ。こうなつては、いかに俊足
の彩雲でも、敵を振り切ること
は不可能だ。

「遠藤頑張れ！」と誰かが
どなった。

「離れろ、逃げるんだ」と心
の中で祈る。

「われ、突入す」
「——」三秒ぐらいで、発信
音はプツリと切れた。 やった

か！心臓に針でも突きささる
ような響だ。運命とはいえ、や
りきれない気持ちだ。

基地空襲警報が、高々と鳴り
響いた。

全機発進
待ちに待った時が来た。

J改隊が、次々と先を争うよ
うに舞い上った。

「チクシヨウ、チクシヨウ」
と、歓声とも悲壮ともとれるJ
改の叫び声が入る。無線のスィ
ッチを受信にする余裕がないの
だろう。

同期生の本田稔も、力一杯撃
ちまくっているにちがいない。
彼は、天誅組の元気者だ。今晚
あたり、またしても撃墜数を威
張ることだろう。

敵の一機が、対空砲火をかい
くぐって、一直線に突っ込んで
くる。ビュッ、と無気味な音。
ガァーン、と大きな音と共
に、身体が浮き上がった。至近
弾で壕の一角が崩れ、壕内は、
きな臭い煙で充満した。

司令は、無言のまま空をにら
み、双眼鏡を握る手にも力がこ

もっていた。上空の各隊指揮官を信頼しきっている様子だ。

呉の方角か、黒い煙が数本と、対空砲火の弾幕が点々と見える。

青空を背景に、大きく弧をえがく戦闘機群。スーッと黒いものが落ちたかに見えたが、一瞬パツと白い傘が開く。燃料給油のために、着陸姿勢に入ったJ改に敵機が襲いかかる。その後方からまたJ改が襲う。

地上の滞空機関銃が、一せいに火を吹き、曳光弾が飛び交う。白煙を引いて落ちて行く。海に水柱が立つ。

全神経を燃焼し尽すような、ものすごい戦闘場面だ。壕の前には、赤黒い血痕が点々として、壮絶というほか表現を知らない。

未だ日は高いが、敵機は去り、ようやく戦闘は止んだ。

この日の撃墜は、五十八機を数えたという。J改隊の大勝利の影に、またしても、還らざる一機の彩雲があったのだ。

高田機の最期

三月二十一日、憲兵隊よりの連絡で、高田機の遭難が確認された。場所は、高知県高岡郡東津野村芳生野の山中である。

翌二十二日、調査のため、松山より、山越えのバスで高知県の現場に急行した。東津野村役場に着いた時は、日もぼっくりと暮れていた。

遭難を目撃した人よりの情報と、高田機の無線連絡等を総合して、調査結果を次のとおり報告した。

三月十九日七時四十五分頃、高田機は、敵機動部隊を発見後エンジン不調となり、基地へ帰投中であつた。東津野村芳生野字丙の上空において、四十機・二十機・四十機の三群よりなる敵戦爆連合に遭遇し、空中戦となつた。敵の集中砲火を浴びた高田機長はもはや離脱は困難と判断し、体当りを決意した。電信員の影浦上飛曹は、最後まで敵情を打電し、そして操縦員の遠藤上飛曹は、傷ついた愛機

を操縦し、白煙を吐きながら、東方より敵編隊に突入した。

(敵機の墜落を確認している)そして見事に刺し違えたものである。

当日の天候は、晴・視界三十哩・雲量三・雲高三千米であつた。

高田少尉は、右頸部盲貫銃創、胸部粉碎。影浦上飛曹は、後方より胸部貫通銃創、両腕二箇所骨折。

遠藤上飛曹は、前頭部粉碎。現場は、海拔七百米の山腹で、急傾斜の森林地帯である。胴体や翼はちぎったように分離し、木の幹を引き裂き、山肌をえぐるようにして突き刺つていた。機体は、三つの峯に飛び散り、体当りのすさまじさがうかがわれた。

村長始め、警防団・国防婦人会の方々の協力によつて遺体は収容され、二十二日には葬送もおこなわれた。遺体は、血まみれになつていたが、三名とも清潔な下着をつけており、出陣の覚悟のほどが感じられたと、

一同涙して語つてくれた。

三魂之塔

高田機を目撃した人々は、その肉弾相打つ壮烈さに心を打たれ、遭難現場には、四季折り折りの花をたやさなかつたという。

あれから三十年、靖国神社法案も解決せず、世相も大きく変わった。村の老人達は、薄れゆく祖国愛の心に憤りすら感じているという。

三人の霊を慰めるとともに、永久の平和を願うしとして、塔の建立が話しあわれた。宮村徳実、山本時郎、西村定延の三氏が中心となつて同志を募り、精神的な問題も乗り越え、建立することに決定した。

そして、老骨にむち打つて、谷川から多くの石を運び上げ、暑さにも負けず、寒さにも耐え、すべて村人達の手によつて建立作業が続けられた。

足場の悪い遭難現場での工事だけに、物心両面の苦勞も多く、一年数か月を要した。しか

し、ついに一心こめた石碑が完成したのである。

碑は、『三魂之塔』と命名された。

四十九年四月十五日、御遺族を迎え、除幕式が盛大に催された。参加された人々は、当時を思いおこし、現在の平和をかみしめられたことでしょう。

自然石の碑は、『三魂之塔』の文字も鮮かに、四国カルストの天狗高原を背景にして、太平洋に向って厳然と立ちはだかっている。

『高原の

桜あぶきや

新日本』

高知県知事 溝淵増己氏作

敷石の一つ一つにも建立の苦労がそのばれ、一本の彩雲の脚が、碑に寄り添うようにして立っているのが印象的である。

当時の助役だった宮村氏は、まだご健在で二人の孫に囲まれながら、当時を偲び、三十五年の道のりを、たんたんと語ってくれた。

殉職の霊を追悼し、平和な祖

国づくりの要にと考えられたとはいえ、このような立派な碑を、しかも村民の方々の手で建立されたことは、ただただ頭の下がる思いがする。

林業を主とするこの辺は、人家も少なく、三方を山に囲まれている。段々状の茶畠もきれいに並び、美しい杉の木立が、両側からすべり落ちるように谷間を作り、緑一色に染めあげている。

その清潔さと素朴さに、東津野村の方々の人間の奥深さを感じた。

『三魂之塔』は、三四三空の殉国を、後の世までも伝えつづけてくれることであろう。

B-29の

松山基地空襲

野村 楠夫（偵四）

昭和二十年三月のある日の早朝、搭乗員整列がかかり、分隊長（渡辺大尉）より「B-29の大編隊が本土方面に向って

いるとの情報あり、本日飛行作業中止、兵舎待機」との指示が出された。

その後で鈴木先任分隊長が指揮所で見送りを行う。分隊長は「俺が残る。搭乗員も誰か残れ」といわれて、有井兵曹と私が残った。

みんなが兵舎（山に穴を掘った防空壕）に引き返した後、しばらくして私が指揮所上の望遠鏡で南方上空にB-29の編隊を発見、鈴木分隊長に報告。分隊長、有井兵曹共に確認したあと、再び私が見ていると、飛行場に近づくB-29の胴体部中央が縦に左右にひらいた。その胴体の中に何列にも並んで搭載された爆弾が見えた。爆弾が太陽の光で幾条にもキラキラッと光ったと思ったら、「ザーツ」とスコールのような音がして機体を離れた。「分隊長爆弾落しました」と大声を出すと、分隊長が「早く指揮所の壕にはいれ」といって、三人が壕に飛び込むと同時に飛行場の各所に落下爆発。指揮所にも命中し

たか、大音響がした。はっと気付くと身体半分埋まり、土の中から掘り出されたモグラのようだった。ホツとして壕の中の通信室を見ると、指揮所に命中した大型爆弾が指揮所を突きぬけ、コンクリート作りの通信室の天井を突き割って約七、八十糎位弾頭を出しているのを見た時は肝を冷やされた。不発だったので助かったが、爆発していたら三人共影も形もなく行方不明の、本当の豚死だった。敵機が去って兵舎に戻ると、みんなが口ぐちに、分隊長が「軍規、命令違反だ、見せしめのために俺がたたき切つてやる」と大いに立腹しておられるから上の士官室に行くな、かくれる、といつてかばったりおどろかしたりされたが、幸い鈴木分隊長のおとりなしで無事許され、事なきを得た。この時初めてB-29の爆弾搭載情況や投下の瞬間をはっきり見た。ほんとうに忘れられない想い出の一つであり、子孫への話の種でもある。

生死は紙一重

木寺日出男（偵四）

想い出といえ、私には松山基地の時だけしかない。それは何故かといえ、私は負傷し鹿屋進出の際一人松山基地に残されたからである。思えば昭和二十年五月四日、〇八一五索敵の搭乘配置にあった。トラックの荷台に乗って機に向っている時、敵空襲で私は足を負傷したのである。でも私は松山日赤病院へは入院せず隊にもどった。分隊長の渡辺大尉が、鹿屋進出前に、松山基地での最後の外出である道後温泉での分隊会に私にも参加を許可してくださいました。また、その後戦いたけなわの時、傷の療養に特別休暇をくださった。そんなこんなで私は、一人松山基地に残されたのである。鹿屋空に復帰したのは八月十五日終戦の日であった。私は渡辺分隊長のため命を長らえた感を今でももっている。

続く

故遠藤中佐を偲んで②

丸山 恒子

この記事は、海原会懸賞文に応募された作品です。（事務局）

前号より続き

遠藤大尉の厚木航空隊葬

遠藤幸夫大尉の戦死が海軍省から公式発表されたのは硫黄島が玉碎する五日前、昭和二十年三月十一日でした。生前の武勲を称え、二階級特進、中佐に任ぜられ陛下からお言葉をお賜りました。葬儀は厚木航空隊基地内の講堂で、全将兵が参列して行われました。士官としては異例ともいえるものでした。海軍軍楽隊の弔歌の吹奏により故中佐の栄誉が称えられました。フミ子夫人は当時二十六歳長男の澄幸七歳長女康子三歳でした。フミ子夫人は妊娠六か月でしたが、皆さん葬儀に加わりました。

フミ子夫人は葬儀の時の様子を思い出されて、次のように

お話されました。

「小園司令にお会いしたのはその時が初めてでした。式の始まる前に司令に呼ばれて居室へ案内されました。小園大佐は鬼司令と言われたほどの豪傑肌の方と聞いておりましたのでおそろおそろ入っていました。ところが、大佐は私の顔を見るやパット直立不動の姿勢を取り、

『奥さん許してください。遠藤君を殺したのはこの小園です。何んとお詫びしていいのか。』と奥さんお許してください。』と絶句すると、深々と頭をたれ、大粒の涙を流されたのです。そして私の手を握りしめ申し訳ないと司令直筆の左のお歌を頂いたのでした。」

惜しみても 惜しみてもなお

余りあり

おおみいくさの行く末思えば

小園司令作

「私は何とご返事したのか、ほんとうに何も覚えておりませ

ん。でも涙はだしませんでした。泣きたくて胸が張り裂けるほどでしたが、軍人の妻として泣いてはいけません。取り乱してはいけません、いつも自分を戒めてまいりました。泣きたいときに泣けないということ、なんと苦しく悲しいものなのか。でも、その時に思いました。

小園大佐というお方は心の優しいご立派な指揮官であり、尊敬できる方だということを知りました。主人が司令のお人柄に心酔して、おやじおやじと慕っていた気持ちがよくわかりました。恨みがましい気持ちなど毛頭ございせん。』

墜落現場目撃者の話

遠藤大尉機が山林に激突し火を噴きだした時青津村の河合正さん（六十六歳）は、「私たちはその時までこの人が有名な墜落王だとは気が付かなかったが、ころがっている飛行靴を拾った時遠藤と名前が貼ってあった。まさかとは思った

が、新聞やなにかで見た写真によく似ていた。病院に運ばれる途中で息を御引取になったのであった。部落へ戻ってその話をするときみんなが声を上げて泣いたのです。敗色濃い戦局の最中一人気を吐いていた遠藤大尉ですからね。私たちから見れば、まるで神様みたいな方でした。正直言ってこれで日本もダメだなどと言いついてガツクリと肩を落としたものでした。「貴重な目撃者であるだけに、河合さんには、大尉の最後の姿が迫力をもって迫ってくるのであった。

河合さんの当時の日記

「遠藤機、高師ヶ原より白煙を吐きつつ田原町上空にさしかかり西進、高度五百メートル、加治部落を経てさらに黒川原上空へ進行、高度を下げる。搭乗員降下すれど落下傘開かず。あわれ人玉となりて、黒川原の茶畑に墜落戦死をとぐ。後に西尾上等飛曹と判明せしが、落下傘のみ、五百メートル南方の大

草部落に落つ。遠藤機黒川原上空で急転東へ進行、そのまま突っ込むものと思われたが、突如機首を三十度南東に変え、機より脱出、そのまま垂直状態で野菜畑に墮つ。機首を変えずに東進すれば漆田部落の密集地帯に突入するは明白なり。思うに部下を先に脱出させた遠藤機長、死の寸前まで民家への迷惑を考慮し脱出寸前に機首を畑地に向けて最後の努力をされたものと推察され、その姿彷彿としその温情のありがたき極みにてただ感涙にむせぶ。」

河合さんは大正三年の山東派兵の際、陸軍軍曹として膠州灣敵前上陸した勇士です。軍隊時代の体験から、監視哨で燃える遠藤機を発見した時、その状況を的確につかみ丹念にメモをつけていたのです。遠藤大尉は常に口癖のように部下に言っていました。「空戦の際はそのだけ敵を海上におびき出して戦え。」
地上には、学校や工場民家などがあつた。撃墜した敵機がそこ

に落ちたら多くの犠牲者がでるし、損害も多くなるからな。」
大尉は死の瞬間までそのことを忘れず実践したのでした。河合さんや地元の方々は中佐の遺徳を偲び、墜落現場の山林に墓標を建てて命日には僧侶をお願いしてご供養をしたのです。「国のために戦つて戦つて遂に散華した遠藤さん、西尾さんを粗末にできませんよ。現在の平和に甘えて月日と共に、忘れがちになるあの戦争の犠牲者のお二人がおいでになるのだと我が心を戒めておられます。」と河合さんは語られました。

なお、未亡人となられたフミ子夫人は大尉の愛機に同乗し共に戦死された西尾少尉の遺体のポケットに、遠藤隊長の出撃後の休暇許可証とメモ帳を発見、婚約者の写真が入つており帰投後に結婚の予定であつた由を知り、お気の毒なことをしたと心を痛めておられました。将来ある青年を死なせてしまったこと西尾少尉のご家族

に対して堪えられない思いのようでした。(西尾少尉も予科練出身)

「昭和五十四年に月光最後の地、渥美郡田原町神戸の河合正様の庭に、遠藤中佐と西尾少尉の碑が建立されて大勢の方々協力により盛大な除幕式が挙行されました。そして河合様ご一家、西尾様に対しての心情も幾分なりとも重荷をおろしたような・・・気持ち安らかなりました」と遠藤フミ子様からのお便りを前に戴いたのでした。

大東亜戦 (表面)

故海軍中佐 遠藤幸男

故海軍少尉 西尾 治

慰霊碑

昭和二十年一月十四日

愛機月光最後の地

(裏面)

つはものは優し

天翔ぶおのが機に

月の光といふ名おぼせつ

川田順詠

空の勇者ここに甦る

四海波永遠に安かれ
空の防人ここに眠る

相良俊輔捧

昭和五十四年一月十四日

発起 河合 正

建立 遠藤フミ子

有志一同

終戦

「八月十五日の終戦の日、厚木基地の隊員が一丸となって降伏を拒否、徹底抗戦に立ち上がり日本海軍始まって以来の大騒乱事件となったのです。しかし二十一日になってようやくく騒乱も鎮まり、連合軍の進駐を受け入れるための準備に基地は大騒ぎでした。生か死か一身一國の関頭（瀬戸際）に立って筋を曲げることなく決然徹底抗戦を呼号し祖國に尽くした熱血の猛将小園司令も遂に獄舎に繋がれたと聞いた時激しい衝撃を受けました。戦争中は英雄のように扱い戦争に負けると今度は抗命罪で牢獄に送り込む憂國の至情にあふれた

あの小園司令がと思うといったたまれない気持ちになるのです。私も軍人の妻であり三人の子の母親です。小園司令の奥様のお心がどのようなものであるか、身につまされて分かるのです。

私も遠藤の亡きあと齒を食いしばって三人の子を育ててきました。その子供たちも今は独立してそれぞれの道を歩んでいます。今ホットしたところですがこれからまだしなければならぬことがたくさんあります。第一番にそれは鹿児島の小園司令のお墓に詣でること、そして小園大佐の復権について及ばずながら尽くしていきたいと考えています。それが生き残ったものの、勤めであり亡き遠藤もそれを望んでいることと信じています。」

司令小園安名大佐の手紙
昭和十九年八月六日

於本部司令

遠藤分隊長殿

拝啓 前後二回の御芳書確か

に拝見、能く短期間に佐鎮の防空態勢を確立せる事 慶賀に堪えず 御熱心なる努力に対し 深く敬意を表し ご苦勞を深謝致し今後益々練成に指導に努められ強化向上を御願申候

当方は美濃辺時枝大尉を始め、練成終了の中尉連中も全部転出を見たるも、着々と補強致し居り、又多数の学生を収容せるも一同大張り切りで勉強致し居るを以てご安心ください度戦局は日に日に悪化す 大いに活躍を御願ひ申候 但し一同充分に御健康に注意ください度

敬具

長崎県大村局気付 神崎部

隊士官室

遠藤幸男殿 公用直扱

横須賀市稲岡町

海軍小園部隊本部

小園安名

予科練之碑除幕・慰靈祭式典の日に

故 遠藤幸男 一期

遺児 遠藤幸子

真青に晴れ渡った大空に突然慰靈飛行の編隊がけたたましい爆音を轟かせて飛び去った。私は、「お父さん！」と心の中で小さく叫んだ。除幕の綱を持つ手にかすかな震えを覚える。

妃殿下が予科練の像の除幕をなさったのを見定めて私は綱を握った手に力を入れた。その瞬間歌碑を覆っていた幕が落ちた。目の前に高松宮妃殿下のお心のこもった歌碑が現れた。「お父さん、立派に除幕しました。幸子がやったのですよ。」突然、予期しなかった涙が頬を伝わって落ちた。堪え切れない涙だった。

今、妃殿下の除幕によって生まれたばかりの兵士の像の前に膝まづいて大声をあげて泣きたい衝動でいっぱいであった。私が生まれたのは昭和二十年八月十日その時にはもうすでに父は永遠の眠りについていた。私の顔も見ずに幸子とい

う女の子だとも知らずにこの世を去っていた。

私は「お父さん」という言葉の味を知らない。甘いのか辛いのか酸っぱいのかその味が知りたくて、父のことが載っている雑誌を読みあさり人の話に夢中になって耳を傾けた。しかし、直接には何も感じ取ることができなかつた。心の虚しさを幾度経験したことだろう。雑誌などには、『B29撃墜王遠藤幸夫大尉』として活躍した功績ばかりを述べているだけで父の味は何も書かれていなかった。

私は自衛隊音楽隊の演奏する「海の幸」に聞き入っていた時、ふと遺族席の最前列にいる一未亡人に目がとまった。亡夫の写真を胸に泣いていられる。きつと今まで苦勞をしながら頑張り通してきた気持ちが一度に抜けてしまったのだろう。私もだんだんその方の姿がぼんやりしてきて、兵士の像が父の顔に見えてきた。口を堅く閉ざして笑っているのか、怒っ

ているのかわからないその顔が・・・母も泣いていた。会場の皆も泣いていた。戦争はもう絶対にあつてはならないのだ。こんなにも多くの人を苦しめ、泣かせるのだから。しかし私たちがはいつまでも悲しんでばかりはいられない。その時は既に過ぎたのである。

これからは、戦争という悲惨なことが二度と起こらないように努力し合い、世の中のために尽くしあつて今まで苦勞を背負い続けてきた父母に代わつて私達二世が立ち上がるべき時が来た事を痛感する。

昭和四十一年五月二十七日

終わりに

この阿見町に住みついて五十数年、霞ヶ浦航空隊、土浦航空隊のあの凛々しい海軍軍人が朝な夕なに闊歩していた姿が今もまざまざ目に浮かぶのです。

軍用道路の桜並木もなつかしい思い出となっています。敗戦の色濃くなつた昭和十九年

夏頃から十七、八歳の予科練兵が厳しい訓練を受け特攻隊員となり、一機一艦打ちてしまふの決意にて、君のため、国の為と命を投げ出して戦地に飛び立ったまま散華したことは夢忘れられざる痛恨事です。

昭和二十年八月十五日遂に天皇陛下の終戦のおおみことよつて、戦争は負け戦にて終末となつたのであつた。空に陸に海に散華した数えきれないほどの、英霊に心からなる感謝の念を捧げて、冥福を祈るばかりです。

今のような平和の世に恵まれるとはあの戦争中誰が想像し得たことでしょうか。実際に体験した者でなければ分からない戦争の悲惨な事。過去の歴史を読み戦争だけは二度とあつてはならないことを、次の世代に伝えることが大切だと信じます。

計らずも、今日は九月二十六日陸上自衛隊武器学校開設三十周年記念式典にご招待戴き参列致しました。色々な催しご

とがございました中に、音楽隊演奏の中の七つボタンの予科練の歌などを聞き、先ず予科練が育ち特攻隊として飛び立ち散華した所、また昭和二十年六月十日にあのB29に大空襲を受けたのだつたと思ひ出し、胸に思ひのあふるるものがありました。

この阿見町の陸上自衛隊武器学校は、日本の守りとして最も大事な存在です。平和と自由と経済的にも繁栄した日本、またその半面世界各国との外交問題、多事多難な様相も見られる現在です。官民ともに国防に關して理解を持ち、国の守りの大切なことを意識しなければならぬとしみじみ思う今日この頃です。

二〇三空記念碑報告書（厚木航空隊）

厚木事件と言われ、尽忠報国の念において人後に落ちない熱血漢であつた小園司令を始め陸軍に脱出合流した隊員は終戦後の海軍刑法による党与

抗命罪の有罪判決を受けました。

従五位勲三等功四級海軍大佐

小園安名

明治三十五年十一月一日生

被告人を無期禁固に処す

昭和四十五年五月一日の内閣委員会において小園司令他

「軍法会議による処刑者で恩赦を受けた旧軍人の恩給権の回復」の案件が可決され、更に本会議において賛成多数を以て案件通過、戦後二十年にして小園司令の名誉が回復されました。(以上報告書より)

小園司令は昭和二十八年秋、釈放されましたが、昭和三十五年十月脳溢血で倒れ享年十一月五日 五十七歳で他界されたのです。

「深見神社の境内に三〇二空記念碑を建立する運びとなり三〇二空の名前とその戦歴を永く後世に伝えることは祖国防衛の任に散華された英霊を慰めることでありまた生き残った我々の願いであります。」

右の趣旨によって記念碑は

完成され、昭和五十五年四月六日に除幕式が行われたのです。

来賓、遺族、旧隊員二百余名の

参列の許に、小園司令夫人、遠

藤中佐夫人の手により白布が

左右に引かれ雄飛の大文字も

鮮やかに三〇二空記念碑が盛

んな拍手の裡に姿を現しました。

この日の小園司令未亡人遠

藤中佐未亡人のそれぞれの御

心の内、御推察申しあげるだけ

でも胸いっぱいになる思いで

了

遠藤・西尾両名の慰霊碑



さらば予科練 ④

乙飛十九期 山田 稔

先輩の手記を読んで

最近、たまたま「空母零戦隊」著者六期岩井勉先輩の文庫本を読み、非常に感銘を受けた。

戦記については多くの先輩が書いておられ、いずれも生死の竿頭に立ち、極限の体験からほとぼしり出た、血と汗と涙の体験記であるが、岩井先輩の場合、戦争という異常ななかにあつて、常に冷静に客観的に、周囲の情勢を判断し対応したが故に、激戦の修羅場をくぐり抜け、今日の氏があられるのだと思ふ。

「出撃第一回は気負わず、見学せよ」大村空の教員生活から「瑞鳳」へ転勤の際の飛行長の言葉を大切な指針として、西は中国・重慶・成都から、南はソロモン・ガダルカナル、東はマールシャルそしてフィリピンの

死闘と、先輩の翼歴と心技は益々伸びてゆく。

この強運の一因に、氏の厚い信仰心が存在すると思う。人間は弱くなると、神仏にすがる。これは当然なことであるが氏の場合、もつと純粹な、神人一如とでもいうか素晴らしい境地であり、私は正しい信仰は己も救い、周りの人々も救うのだという事を痛感させられた。

氏の伶俐な矛先は、海軍当局にも向けられる。その一つが、乙種と甲種の設定で、この安易に実施された制度が、いかに大きな波紋を、甲もそうだけれど、特に乙の人々に甚大な戦中は勿論、学歴認定においては戦後もお影響したと説かれる。

私など、当局は予科練制度に気を良くしたものの、例の貧乏人根性が出て、二年余りの教育を乙に与えるのが惜しくて、その修了者を甲としたのだと思つているがしかし、氏も農学校からの入隊者のおりまた、私の期でも甲と同様の学歴の方が多い。実に今もって不可解な

制度である。

純心な若者をゆがめた当局に対する批判は、予科練・特に優秀な乙であればある程、痛烈に次の如く続く。それは「指揮権」の問題で、経験の豊かさを無視し不利な空戦や、出さずにすむ犠牲を出した例が多いと慨嘆されている。

ここで私の期の場合を例にして恐縮だが、昭和二十年二月卒業して操縦組は大部分飛練四十二期（飛べない飛練）と進んだが、他の一部及び偵察組のほとんどは、震洋特攻へ転出させられていった。

させられていったというのは「せめて飛行機で」という未練と、二年三か月の予科練での教育は一体何だったのか？。

そして現実のベニヤボートを見て全員ガツカリ、日本海軍の現状をハッキリとこの目で見たと、同期生は語っている。

氏も著書の中で、特攻の理不尽さ、非情さをフィリピン、また、沖繩の項でのべられているが、私の期の場合、当初十九年八月選出では〇×式で志願さ

せたものの、×と記入し、あくまで飛行機へと望んだものは、それでも可との話を真に受けて「意気地なし、死ぬのがそんなに怖いのか？」と徹底的な制裁を受けた者や「俺は親一人子一人、親爺は誰がみてくれるのか？」「俺が死んだら両親が困るんだ」（二人ともコレヒドールで戦死）と友に心情を吐露した後出て行ったけれど、特攻はこういった事情を全然考慮せず決定した例も他には多いのではないか。

ともあれ、昭和五年予科練制度という素晴らしい組織を作りながら、十分それを活用できなかったのは当局、特に中枢部の方針があまりにも破局へ向かって、性急に過ぎたからであらう。

六期生といえは、今、雄飛紙上で、毎号、ある時はおかしくある時は涙する「衝哭の海」連載中の高橋先輩がある。

「戦いに終始して耐え抜いた男」氏は宮城師範からの優秀な転校組で、この点私と同じ経歴から非常に親近感を覚える。

私の場合「村の名誉のために是非！」と村当局から師範行きを断念させられたが、当時として向学の少年の行く道は、大体同じケースを辿ったことであるう。

日蓮聖人は「一切の悪の中で第一の悪は政治が悪く他国に破らるること、つまり国王が善人を罰し、悪人を愛し用いれば、必ずその国は他国に破れる」と書いておられる。敗戦の日本の場合、七百年前のこの文は活きなかったであろうか？。

そして今、バブル崩壊後の超不況時代、世は移り、時は変わっても珠玉の先輩の手記を読む（読ませて頂く）ことによつて、考え、悟り、予見することが出来るのではないか？と思う。

松浪先輩（七期）の温情

先輩と私の接点

戦前・戦中先輩と私の接点はない。当然であらう。片や予科練の大先輩、しかも、日本海軍艦爆隊のエース。

搭乗員の墓場と言われたソロモン島の激戦場では負傷した

ためからくも生還し、また20年4月の、宇佐八幡特攻艦爆では殿の隊長として出撃寸前、空襲により乗機が破壊され、強運にも生き残った歴戦の大先輩。

（城山三郎著「指揮官たちの特攻」では国分まで進出したとなつてゐる）

一方の私は20年2月、最後の四十二期飛行練習生として、東京の羽田の隊門をくぐつたが、すでに飛練や、予科練教育は中止となり、雛鷺ならぬ、鳴かず、飛ばすの舌切り雀に終わった若輩、それが、事もあらうに、戦後、大先輩宅で奥さん共々の、手厚い接待にあずかったのだから、まったく夢のような珍事である。戦後いつ、どこで先輩とは共鳴したのだろうか？先輩は雄飛会九州支部の事務局長、私は埼玉のそれなので、何処かの全国大会ですれ違つたかもしれないが、只一つ言えることは先輩も、私も筆まめというか、文を書くことは大好きということである。

先輩は早くから、激烈な自身

の戦争体験を手記にまとめ、昭和42年発行の「あゝ予科練」に「艦爆隊、空の墓場」へ向う」を掲載、引き続き「雄飛」や

「予科練」「天掛ける若鷲」等に発表、昭和56年には体裁・内容とも素晴らしい「命令一下、出で発つは」サブタイトル・在ラバウル、五八二空の死闘、を刊行、その後も生存同期と共に「予科練のつばさ」を刊行する等、実に驚嘆すべき大活躍であり、衰えを知らぬ文才には只々敬服の一語につきる。

一方の私も、下手なものの書きを自認しながらも、農林水産省在職中、共済や労組広報誌に、予科練関連の記事を発表してきたし、「雄飛」が発行されるや、手記や詩、または写真まで投稿し、挙句の果てには種々難題もあつたが「雄飛の記録」を発行するに至つたのである。

何故、こうまでして予科練にこだわつたか？それは只一つ私の意地がそうさせたのである。

先輩には止むに止められない、苛烈な戦いの体験発表があ

り、私にはやはり止むに止められぬ、予科練指向があつたのである。

戦後、「予科練くづれ」「特攻隊くづれ」が喧伝され、確かに終戦前には何万という予科練生の誕生を見たので、一部不心得のものも出たかも知れぬが、その言葉は私のプライドが許さないのである。

昭和18年、土空在隊中の私たちは皇太子（現上皇）のご来臨を戴いた。前年には天皇陛下である。こんなことって？一航空隊（霞空も同時）で今まであつたであろうか？（陸士では天皇の行幸あり）当時、第19連空の司令官で、皇后様の兄君である久邇宮朝融王海軍少将が、土空在隊中であり、その関連も影響したと思うけれど、これは実に希有な事なのである。

予科練の名誉はもちろん。その一事だけでも今誇つて良いと思う。

（宮様には何回か教室巡視等でお会いした）

この栄光と、自負を私は忘れてはいない。素晴らしい先輩、

そして愛すべき後輩、エリートコースを私たちは歩いてきたのだ。

そんな思いから私は筆をとることを止めなかつた。そして、いつしか先輩とも年賀状のやり取りが行われ、ついにお会いし、一泊と言う超激的な結果を招来してしまつたのである。

先輩は平成十四年七月に、八十三歳の天寿を全うされその波乱の生涯を閉じられた。私は生前の恩に報いるため、その追悼文を平成15年4月発行の雄飛一四七号に発表、その写しを大分へ送つた処、大分の事務局からも連絡があつたと奥さんからの電話である。今も奥さんはご健在だろうか？。

いかにもみかんに最適な、南向きの賀来餅田のご自宅を懐かしく思い浮かべるのである。

先輩に一宿一飯の恩

そもその発端は昭和五十二年、南九州の串良空で行われた第三十三回慰霊祭と、併せて串良空でかつて整備予科練として、苦闘された方々の碑「翔

空」の除幕式に私が招待されたことに始まる。

（この模様についてはこの次に詳細に発表させて頂くので省略します）

元々、私はこれらの式典に出席する等、夢にも思っていないなかつた。然し、次から次と予科練関係者からの支援と、ご協力を頂き（こんなに頂いたのは初めてで）素晴らしい旅行となつたのである。

まず往復の飛行機代に余る旅費が、串良空の八期生である広島末光邦治氏より送られた。同氏とはもちろん未知の間柄で、只戸惑うばかりであつたが、出席を条件について頂いた。

次に二十四期会長の藤原氏と同行することになり、これも心強い。只、羽田一番の発なので生家からは無理、そこで品川在住の原口元班長宅へ一泊お願いした処、快諾を頂き、お風呂、朝食、味噌汁まで用意して頂き只、恐縮。

藤原会長と弥次喜多道中は、鹿兒島では西郷どんの墓に詣

でたりで世話になったが、翌日慰霊祭終了後、私は青島に宿を取っていたので列車でと思っていた処、同じく青島へ向かう今日の参列者の同窓の車があり、それに乗れということでも難く便乗、途中早くも夕闇の迫る、鵜戸神宮や、日南海岸伝いに無事青島着、お礼を言い私は予約した宿へゴールイン。

翌朝食前に青島を見学、その後列車で大分・別府へ向かった。あらかじめ、乗る列車予定到着時間は先輩に知らせておいたが、果たして一発でお会い出来るだろうか全く不安であった。先輩の写真は「あ、予科練」にあったが、それも入隊時のもので、その後相当変わったと思う。

大分駅に着いた。と、広い待合室の中央でニコニコ笑っている人、先輩だと直感した私は「先輩ですか？」と声をかけると「ハイ。そうですよ、良く来られましたね」とソフトな対応にビックリ、後で聞くと先輩は陸自を三佐で御退職後、銀行にお勤めとか、なるほどとうなず

ける。

「さあ、家へいきましよう」先輩はほとんどん電車のホームの方へ、「一寸待ってください」と言う間もなくである。

当初、私の計画は駅を降りたら、先ず先輩と店で、コーヒー、その後、美味しい料理を出す店に案内して頂き、懇談の後私は別府のホテルに予約しておいたので、天下の名湯にどっぷり浸かる予定が、軌道修正もいろいろ、只々驚くばかりだ。



松浪先輩と私

暖かそうな賀来餅田の御自宅で、美しい奥さん共々大歓待早速一杯が始まった。「この酒は身体に良いですよ」と言わ

れたが生憎、私は下戸で、情けないがもっぱら先輩に注ぐ一方、そのうち昨日からの疲れで上・下の脛が自然とくっつく。それを笑い乍ら見ていた先輩。やがてダウンした私は、二階のベッドで休ませて頂いたが、翌朝起きた時は、既に先輩は出勤した後で、お礼の御挨拶もせず、慌ただしいお会いと別れ、これが人生というものであろうか！

先輩に改めて感謝！。

先輩と特攻八幡艦爆隊

二十年二月十六日、練習航空隊に対し、特攻編成が発令され当時宇佐空で人事分隊長をしていた松浪先輩は、分隊長山下大尉に命ぜられて、予科練出身搭乗員の特別訓練をすることになったが、山下大尉は「特攻には最初俺が行くから、最後は分隊長で締めてくれ」また「分隊長は艦爆出身だから、最後は艦爆で行くか」と艦爆出身の先輩に配慮してくれた。

四月三日、いよいよ宇佐八幡特別攻撃隊第一陣が、官民盛大

な見送りを受け、桜の花をかざしながら次々と離陸する。続いて四日、五日と第二次・第三次が、艦爆隊は串良基地、艦爆隊は第一国分基地へ進出していった。そして七日、第四次の出発で宇佐空の艦攻・艦爆は使用機零となり、残存の彗星艦爆数機で最後、残った先輩ら教官・教員のみで出撃することになり、先輩も出発の前に、最愛の奥さん、そして知り合いの家々で挨拶をした翌日、空襲によって彗星は弾痕だらけとなり、先輩らの特攻は中止となったのである。

ここに宇佐空特攻隊の名簿があるが、(注・原本は、神風特別攻撃隊隊員の記録。この本は寄居町故十七期坂本政男英霊の兄弘氏より、私が墓参の折頂いたもので、弘氏は英霊が19年10月26日戦死しているの、特攻ではないか？と本を購入したが名前はなく、その後アメリカ駆逐艦長より政男英霊のネームが届き話題となる)三人乗りの艦攻は、三機を除き、全三十機が全て搭乗員はペア

三名であるのに対し、二人乗りの艦爆は、無線機搭載機十二機のみで、他の37機は全て一名である。

これは一体どういうことなのか？この様な編成は珍しく、他に一・二隊若干あるのみで、整然として実施されたのは宇佐空のみである。

すべて松浪先輩の配慮だと思ふ。勿論上司があり、先輩一人のみでは決定しないが、歴戦の先輩に異をとる人はいない、皆無ではないだろうか？

開戦前から艦爆乗りとして、ソロモンの死闘に重傷を負って、九死に一生を得た先輩は、その貴重な体験上彼我航空機の差、なかなしく敵戦闘機の妨害を排除し、熾烈な防衛砲火をかいくぐつての、艦船攻撃の困難さを身をもって知っておられたから、特攻に対しても、その難しさ、そして効果についても疑問視していたのではないだろうか？

当時の戦局として、特攻は止むを得ないかもしれない。そし

て崇高であり、特攻隊の犠牲的精神は何者にも代え難いし、尊い。

然し、一方で、搭乗員も貴重である。一人前に育成するためには、本人はもとより、教える側にとつても、血の出るような厳しさである。

だから、特攻からなるべく搭乗員を救いたい。その結果、宇佐空艦爆隊では、必用機以外定員を割り、一名としたのである。

今までこんな事実があった等、少しも気づかなかった。まさに、七十年経って初めて判明した事実であり、実力ある先輩だからこそ、できた温情の結果である。

こんなに遅くなつて、事実を知り、只々申し訳ありません。先輩—本場に有難う。

心を込め、今は大空高く、かつての仲間たち英霊たちと、集い、語らつて居るのである先輩に心からお礼を申し上げ、相変わらず、下手な物書きの私をお笑い頂きたく、筆を執つた次第です。 合掌

続く

弟

海原会理事（匿名）

私には、2歳年下の弟がいます。子供のころは「やんちゃ」で人が「右」といえば「左」と主張し、「左」と言えば「右」という性格で、親戚からは「天邪鬼（あまのじゃく）」と言われ面倒くさがられていました。

地元の工業高校を卒業し日本を代表する大手企業に就職し家庭を持ち、二人の出来の良いい娘を授かり定年まで勤めあげ、高卒ながら課長職まで勤め、上司からは信頼され後輩からも慕われる存在でした。

長男であるにもかかわらず、仕事の都合で面倒を見ることのできなかつた私に代わり、両親の面倒を二十年以上見続けたくれた、多少天邪鬼だが頼りがいのある面倒見の良い優しい弟です。

その弟が、喉頭がんに侵され声帯の摘出手術をすることになりました。

手術を間近に控えた弟から一通のメールが送られてきました。

「（前略）……俺の場合、いま部分切除ではなく全摘出手術を行えば、今の声は失うが再発のリスクは軽減される（中略）……以上の事から昨日主治医に『全摘出手術を行います』と最終術式を伝えました。

自然と涙が溢れていました。主治医も『勇気ある賢明な判断です』と言っていました。

最終決断をした今は、気持ちも楽になり不安感もなくなりました。今までは、周りが心配するので表面には出さなかつたが、声を残すか命を取るか、気持ちの中でキツイ毎日でした。単純なことで、命に決まっています、頭では理解しても、気持ちにそれがついていかないう日々、苦しかったです。（中略）……人間って欲が深いんですね、初めは声を残したいと思つていましたが、気持ちが全摘出となつたら、今度は手術

が無事に終わるようにですからね。

今度のことで、ほんのちよっぴり特攻隊員の気持ちがあつた気がします。彼らも生と死の葛藤が凄くあつたと思いません。そして死を自分なりに受け入れた時、気持ちがあつたのではと！

当然、彼らの気持ちと俺を比較すれば、俺の気持ちの葛藤など小さなものですが！

でも大きく違う事は、彼らには「生の選択肢」は無く、俺には「生の選択肢」があつたことです。

手術が成功したら、残りの人生、声は出ないかもしれないが、新しい人生を頑張つて進んで行くつもりです。……(後略)……

雄翔館の玄関を入ると正面に「乙飛十八期生同期生四人組」のレリーフが掲示されています。

彼らは谷田部海軍航空隊(茨城)を出発し、沖繩戦での特攻に参加するために鹿屋基地(鹿

児島)の近くにあつた野里小学校の校舎を仮兵舎として出撃までの数日間を過ごしました。四人ともこの写真を撮影した数日後、相前後して特攻戦死しています。私は、「選択肢のない死」を数日後に控え、どうしてこんな笑顔でいられるんだろうといつも不思議でした。

特攻を数日に控えた乙飛十八期四人組



世の中には、大きな病を抱え闘いつつおられる方が大勢いらつしやると思います。

複雑な社会環境の中で大きなプレッシャーに押しつぶされそうになっている方もいるでしょう。

もし貴方が厳しい「選択」を迫られた時、雄翔館・雄翔園を訪問されて戦没予科練生の声に耳を傾けてみてください。

新たな人生の「選択肢」が見えるかもしれませんよ。

(追記)

弟はこのメールの後、声帯全摘の手術を受け無事に終了しました。

術後の会話はしばらくの間筆談のみでしたが、今では「食道発声法」という声帯の代わりに食道壁を振動させて音声に代える発声法を習得し、まだ十分ではありませんが、普通に会話が出来るまでに回復しました。

会員の皆様で興味のある方がいましたら、紹介しますのでご連絡ください。

天国へのメッセージ 第三回

昭和二十年あいついで

沖繩に散つた三人へ

両親亡き後、たった一枚残された写真から調べて皆様のことを知りました。

辛過ぎたのか、長い間封印されていた皆様の事を、今後は親族間で共有し家族の誇りとして記憶し忘れません。

★鮫島 豊様

法政大学を繰上げ卒業し、特操一期生へ。在学中はアイスホッケー部主将。陸軍「第五十一振武隊 悠久隊」として部隊に先だち五月六日 一式戦闘機隼Ⅲ型機で知覧より出撃戦死

二十四歳(義母の兄)

★奥瀬正治様

旭川から満州、沖繩を転戦。妻子を残し第二十四師団山部隊で軍医の元、負傷兵の救護にあたる。激戦の最中五月二十四日日本島新川にて戦死、功

績者に名前も。

三十一歳(父の弟)

★成谷紘一様

予科練甲飛十期 教官 百里
原航空隊「皇花隊」として、
四月十六日 九七式三号艦攻
を操縦して串良基地を發進し
嘉手納沖で戦死

二十一歳(母の従兄弟)

貴方たち三人は、いつも私
達家族の心の中で生きていま
す！

貴方達の、国を思い家族を
守ろうと立ち上がった勇気を
いつまでも決して忘れません。

上田佳江子

予科練教官として①

海軍文官 清水 房雄

ある記念講演より

はじめに

八月十五日に限って言えば
一分間で済んじゃうんですけ
れども。……と言いますのは
私は予科練教官と言いました
も武官の戦闘員じゃなかった

もので、文官と言ひ、材料は
非常に少ないんです。

ただ自分として、あの場合
にどんな所に位置していたか
ということをお話しすれば、
予科練のある一つの部隊の印
象ですか、そういうものを掴
む、糸口ができるのかなとい
う感じがします。

予科練とは

予科練という言葉がござい
ますけれど、これは「あだな」
のような略称でございませう。
もとは「横須賀海軍航空隊飛
行予科練習部」というのがご
ざいまして、その頃私はまだ
海軍に入っていないんですけ
ど、それが土浦に引越しま
して独立したようなしないよ
うな。

つまり、学習内容は独立し
ていないみたいですが、一応
部隊としては独立して、「土
浦海軍航空隊」というのがで
きたんです。これは実戦に参
加する部隊ではないんです。
すぐお隣には「霞ヶ浦海軍航
空隊」これは戦闘部隊だった

んです。そういうわけで予科
練というのは略称ですけれど、
例の西条八十作詞、古関裕而
作曲の「七つボタン」の歌で
予科練という言葉が世間に広
く使われて、それで流行した
と思ひますけれども。

普通の軍隊と全然違うんで
す性格が。それはどういう内
容かと言いますと、中学四年
終了でもちろん試験を受けま
すけれど入っていたのが甲種
飛行予科練習生と言ひます。

それから、中学の二年ある
いは高等小学校つてありまし
たね、その二年終わつて入っ
てくる者が乙種です。

次に海軍は十八才で志願し
て水兵になりますけど、水兵
になつた後で、飛行機乗りにな
りたいつて志願して、特に
そこから再検査しますけど入
つてくるのが丙種です。そし
て特乙というのがあつたんで
すけど、これは乙の短期間の
養成だつたようです。

小倉中学校から土浦へ

私は、昭和十五年に東京文

理大の漢文科を出まして、福
岡県の旧制の小倉中学校に向
けられました。それこそ配給
です。

私は千葉県の人間ですから
せいぜい静岡くらいと思つて
いました。いきなり講堂に
卒業生を全部集めて「だれだ
れ、どこそこ」とやられたん
です。小倉に二年おりました
時に。おそらく軍の方から大
学に連絡したんだと思ひます
けど、いろんな部隊を増やす
んで教官が必要だといふので
研究室から、これぞつてい
のを捜して、そして連絡した
といふ事だつたと思ひます。

私には陸軍士官学校の教官
にどうかつていふ口がきて、
それから海軍の航空隊の教官
の口がどうかつていふ話が来
たわけです。

個人的な事になりますけど
当時結婚したての女房は千葉
県生まれで、いきなり九州に
行ったものですから帰りたい
帰りたいと朝晩やられますか
ね。こつちも弱いもんですか
ら。それじゃ近い方がいいだ

ろうっていうんで土浦に志願して行つたわけです。

命拾い

今、申しましたように、基礎訓練をやるころなんです。土浦は。で、教官には武官と文官とがいます。武官は軍人でございます。これは軍人としての教育を少年たちにやるわけです。

我々文官というのは普通学の教官というわけです。数学科。理科は土浦航空隊には文官教官が百人くらいおりましたかね。そこで若干の期間、これは種類によっていろいろあるんですけど非常に短期間の教育で、それで練習部隊の方に回されてそれから実施部隊に回され、戦闘に加わるという仕組みになっていたよ

うです。これは短期間で、この期間は今の学校のように学年末とか学期末とか一斉にはつきりとは切れないんですね。甲種は甲種、乙種は乙種で入ってくる時期が違うから、それぞれ、ずれているんですよ。

ですから私など今思い出しますと、爆沈してしまつた「戦艦陸奥」ですけれどね。あれにもう少しで乗る所だつたんです。艦務実習というのがあります。まして練習生に船の上の生活をさせるために約一週間、その船に乗せて、艦内で生活させるというのが予科練の一つの教育にあつたわけです。文官教官はくつついていけばいいんですよ。何をやるかと言

えば、うまいもの食つて、ぶらぶらしてて、いいつていんですよ。それで或る教官が都合つかないから私に、代りに行かないかと言つて、その「戦艦・陸奥」なんですが、「いのさ、あんたは、うまいもん食つてりやいんだ」つて言われたんですよ。ところが私は私の教えているクラスがあつて、私がその船に乗つちやうとそのクラスが休講になつちやいますからね。それで乗らなかつたので助かつたんです。

「昭和十八年六月八日甲飛十期生百五十三名艦務実習のため乗艦していた【戦艦・陸奥】

が突然爆発した。爆発は原因不明救助され助かつた予科練生は僅か六名だつた」

文官とは私は甲も乙も丙も特乙も全部教えました。丙というのは兵隊から上がつていますから、時間中の姿勢がぴしつと動かないんですよ。頭が全然動かない。その代わりに頭に入らないんですよ。

で、甲は中学から来ていますから割合と、だらしないんですよ。これは頭がいいんですよ。

丙の中では階級がみな違ふんです。ミッドウエーで生き残つたなんての猛者（もさ）もいるんですよ。もともと軍人ですからね、そういういろんなものがありましたから、こつちもそれによつて、時間中の態度なんかも変えないとおかしくなつちやうですね。

今、申しましたような文官ですが、空襲でいざ戦闘となると邪魔者扱いなんです。階級ばかりは割合に上ですかね。

私など大学出て三年目になりましたけれど、高等官務七

等と言うんですか。ですから上の方ですよ。

で戦闘が始まりますと邪魔になるばかりなんです。つまり文官、軍医、主計は指揮系統に載つていない。

柴生田倉さんつてご存じでしょうが、斎藤茂吉門下の方「陸軍士官学校」の教官をしてましたけれども、ある時僕に言いましたよ。

軍人、軍属、馬匹、文官。馬の方が必要なだつて。文官はその後だつて笑つてましたから。海軍は馬はいなかつたですけど、軍人、軍属の次なんです。

まあ、そういう訳で予科練のしくみを大体話しましたけど、そのしくみをお話ししないと、これからの私の立場が判りにくいと思つてます。

小倉中学校から土浦へ

私はさきほど申しましたように、大学を出て二年ばかり小倉中学に勤めましたね。小倉中学というのは高校になつてから、甲子園で何回も優勝した学校ですね。私がい

は野球は全戦全敗でした。勝ったことなかつたんですよ。私とその学校を出ちゃってからです。ね勝ったのは。

で、昭和十七年の一月、海軍に雇われました。嘱託でございます。ですからいつでも首になる仕掛けになっていきます。土浦に行く前に横須賀の海軍砲術学校で、三ヶ月訓練されました。

海軍の教官になるために何をやるかと言うと甲板掃除からでした。どんどん卒業で、三ヶ月で航空術とかも終わることになっていきましたが、操縦なんかできませんよ。装置の中でぐるぐる廻るだけで終了なんです。

で、土浦に行きまして学校で教えるような普通学を教えただけです。これは教官といつても軍人と違いますから、割合に呑気ですけど。それでもうできたということになるんです。妙なものでしたね、速成教育というのは。

土浦時代
いろいろなことがございま

してね。軍人としての精神教育には立ち入れないんです。数学のSさんという人、東北の人で、この人が自分が数学を教えている練習生に感想文を書かせたんですよ。

それがその部隊の下士官か何かに見つかって段々話が上に行ってS教官と呼ばれましたね、「ラバウルの鬼」と言われたつていう、戦闘機乗りのすごい少佐がいたんです。それが中心となり五、六人でSさんを言葉の上で袋叩きにしたんです。「練習生の精神教育に立ち入った」と言つて。

しかしSさんも相当なもので絶対あやまらなかつたです。ね。いい加減で手を切らないでがんばるつて言つて、とうとう謝らないでうやむやですんだんじやないですか。

つまり、精神教育には立ち入れない、学科の技術だけ教える軍によつても、教官と言つてもちよつと違う訳です。パートみたいなもんです。

土浦に十七年一月からいました間に予科練がどんどん沢

山出来ちゃつたんですよ。戦争終わつてから聞きました話では全国で十八あつたと聞きました。これは確認してありません。

西宮へ

土浦にいてその次に十九年の三月に三重海軍航空隊、三重県にありましたけど、その所属になりました。勤務はその分遣隊、西宮の関西学院大学の一部分を、まあ占領したわけでしょう。そこで少数の練習生を教え、半年やりました。所帯が小さくなりました。西宮では文官と教官八人なんですよ。

八人ですとね、百人とは違つて本当にみな仲良くやつてました。

良いことも悪いことも。何しろ精神教育には立ち入れないということですからね。

そしていざとなつたら邪魔だからどこかに隠れなくちゃいけないつてわけですよ。

軍人とは違つたんですよ。

それから、後に高野山航空隊になつたそうですけれども、

三重海軍航空隊高野山分遣隊に転勤。お寺の一部分、東半分でしたかな、占領しての隊。国宝級の物もみな台無しにしてしまつた、ようですね。練習生の住居にしてみました。から。そこで私は半年勤めました。

(この頃に清水さんは、高野山航空隊の隊歌を当時の司令、千葉成男大佐の要請により作詞されました。)

倉敷航空隊へ

それから二十年二月に、倉敷の海軍航空隊に転勤。もう文句なし。いきなり、「ナゼフィンセヌカ」つて電報が来たんです。発令しちゃつて、こつちは知らないでいたんです。

電報が来て何だつてんで隊で調べるとつづくに転勤になつてるつて事。

ボンボンボンと飛ばされて二十年の二月に倉敷に行つて、八月十五日を迎えるわけです。

それが私の戦争を終わるまでの経歴です。

次号に続く

(公財)海原会寄付者芳名簿

(敬称略)(単位千円)

令和四年一月十一日より

- 五 樋口 三郎(甲13)新潟
- 五 戸張 礼記(甲14)茨城
- 五 近藤 智(乙22)香川
- 五 坂本 宣久(乙21)東京
- 一〇 加藤 正春(一般)東京
- 五 鈴木 茂男(甲16)東京
- 一〇 磯貝浩次郎(贖3)岐阜
- 五 福本 貞之(乙21)静岡
- 三 上田佳江子(一般)北海道
- 五 飯塚 直一(一般)茨城
- 五 大野 敏明(一般)茨城
- 五 岩館 芳雄(乙24)東京
- 五 平野 勇二(一般)宮崎
- 三 井出 隆夫(乙23)静岡
- 五 佐藤 太造(一般)大阪
- 五 金塚 雅恵(一般)東京
- 三 深山 鋼一(一般)千葉
- 五 蛭田 章(乙24)茨城
- 五〇〇

多田野 弘(一般)香川

海原会へのご芳志

誠に有難うございました。

事務局日誌

一月

十一月

日本立体(株)訪問
於 茨城県小美玉市

理事長が計画している零戦
実物大模型製作の事前調整
のため、平野理事が訪問
十三日

阿見町公室長訪問

於 阿見町役場 慰霊祭
記念演奏会の調整のため平
野事務局長が訪問
十八日

陸上自衛隊関東補給処総務
部長表敬

於 陸上自衛隊霞ヶ浦駐屯
地 酒井副理事長及び平野
事務局長の二名で慰霊祭支
援について依頼のため訪問
十九日

阿見町観光ガイド会長来所
於 海原会事務局 意見交
換のため阿見町観光ガイド
会長、副会長及び予科練平
和記念館豊崎学芸員が来所

二十五日

海上自衛隊横須賀地方総監
表敬

於 横須賀地方総監部
慰霊祭記念演奏会への横須
賀音楽隊の派遣要請のため
に、池顧問と平野事務局長
が訪問

二月

四日

阿見町本郷ふれあいセンタ
ー訪問

於 本郷ふれあいセンタ
ー 平野事務局長が、慰霊祭記
念演奏会会場調整のため訪
問

七日

NHKプロデューサー来所
於 事務局 番組制作のた
めに貸し出しをおこなって
いた資料返納のために来所
十七日

二月理事会開催

於 事務局
出席者 酒井・安井副理事
長、平野・篠田・湯原・山下
の各理事 テレビ会議参加
者 菅野理事長・保坂及び

星指理事

二十四日

会員来所
於 事務局

会員の 大野敏明様が表敬訪
問された。

二十八日

理事来所
於 事務局

酒井副理事長が業務指導の
ために来所、及び山下理事
が事務作業支援のために来
所した。

三月

一日

小林正志氏来所
特定費用準備金口座の取り
扱いについて意見交換
ミュージックプラント現地
確認

於 本郷ふれあいセンタ
ー 慰霊祭記念演奏会会場を、
音響照明担当業者が視察

二日

武器学校OB会幹事会
於 武器学校
酒井副理事長、平野理事、
篠田理事が出席した

海原会会員の皆様へ

大切な人と寄り添うお葬式

家族葬

のことが知りたい

お葬式のご依頼や
「もしものとき」に
備えた事前のご相談
年中無休で承ります

相談・見積無料

お客様満足度
99%

自宅葬・一日葬、お別れ会のほか、
ご希望に合わせた
お葬式プランがご用意しています。

※当社施行客アンケート調べ

新型コロナウイルス感染拡大防止に万全を期しています。

お墓

お墓のことなら何でもご相談ください。墓石工事は信頼の10年間の保証書付きです。

墓所工事

標準価格
(10万円以上)の
10%割引

サービス提供エリア:
関東・関西・東海



「お墓のお引越しガイド
& 事例集」

無料で資料を差し上げます。

お葬式

葬儀一式をセット化した「葬儀式セットプラン」を各種ご用意。最適なプランをお選びいただけます。

葬儀

祭壇標準価格の

20%割引

※一部斎場、一部商品は除く。
新花で送る家族葬は
優待料金
サービス提供エリア:関東



「お葬式の流れが
わかる100項目」

無料で資料を差し上げます。

お仏壇

仏壇店は首都圏に2店舗(国分寺・千葉)。伝統型仏壇や家具調仏壇、手元供養商品まで豊富な品揃えです。

仏壇

店頭価格の

25%割引

※ただし、催事特価品と
仏具小物、手元供養商品
は対象外
サービス提供エリア:関東



「お仏壇カタログ」
「特選 お位牌」

無料で資料を差し上げます。

お問い合わせは
海原会事務局へ

03-3768-3351

お問合せの際は、「予科練を見た」とお申し出ください。

MAO
MEMORIAL ART OHNOYA



メモリアルアートの大野屋

<http://www.ohnoya.co.jp>



「予科練」第470号5・6月号

昭和53年7月26日第3種郵便物認可(隔月奇数月1回1日発行) 発行人 菅野寛也

編集人 保坂俊雄

発行所 下

300-0301

公益財団法人 海原会
茨城県稲敷郡阿見町青宿489番地1

(慎輝ビル3階)

郵便振替
001401543332
00291886154332
00291886154332
00291886154332

定価500円